HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ハイランダー研究教育センターにおけるコミュニティ・リーダーの学び ： ワークショップ ”Rage, Hope, and Community”の参与観察を通して
Author(s)	藤村, 好美
Citation	社会教育研究, 37, 23-40
Issue Date	2019-11-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/76478
Type	departmental bulletin paper
File Information	004-0913-0373-37.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ハイランダー研究教育センターにおけるコミュニティ・リーダーの学び
―ワークショップ ”Rage, Hope, and Community ”の参与観察を通して―

藤　村　好　美*

目　　次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
１．ハイランダーセンターの設立と概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
(1) ハイランダーセンター設立までの経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
(2) 現在のハイランダーセンター・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
(3) ハイランダーセンターの活動目的、組織とスタッフ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
２．ワークショップ ”Rage, Hope, and Community ” ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
(1) ワークショップの趣旨と対象・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
(2)ワークショップの参加費・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
(3) 参加者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
(4) 一連のプログラムの流れ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
(5) グループ・ワークの例―プロブレム・ツリーを描いて地域課題について話し合う・・・・ 36
３．ハイランダーセンターのワークショップの特徴―まとめに代えて・・・・・・・・・・・・・ 39

はじめに

ハイランダー研究教育センター（Highlander Research and Education Center、以下ハイランダーセンター、またはハイランダー）は、ハイランダー・フォークスクール（Highlander Folk School、以下 HFS）の設立以来 86 年以上にわたり、アメリカ合衆国南部において草の根の民衆教育運動の発展と地域社会の組織化のための活動を展開してきた。ハイランダーセンターの前身であるハイランダー・フォークスクールは、1932 年から 1961 年まで、アメリカの中の第三世界とも言われたテネシー州のアパラチア地域で、民衆の学びとエンパワメントの場となった民衆学校である。そこでは、創設者のひとりであるマイルズ・ホートン（Myles Horton, 1905-1990）の教育理念のもと、地域の鉱山労働者の教育や南部の労働組合の組織化のための教育、南部の農民組合の組織化の試み

* 教育学院研究生・東京大学教養学部非常勤講師

など、時代や地域の要請に応えて、社会的に排除された人々の学びの場として、宿泊型のワークショップが展開され、特に 1950 年代から 1960 年代にかけては、南部の公民権運動の学校として、シチズンシップ・スクール・プログラムなどを通して、アメリカの公民権運動にとって指導的ともいえる役割を担ってきた。1950 年代から 1960 年代にかけて全米各地に蔓延した赤狩りと反共の嵐の中、1961 年に閉校を余儀なくされた後も、シチズンシップ・スクール・プログラムは別組織で活動を続け[1]、また 1961 年には HFS に代わってハイランダーセンターが立ち上げられ、今日に至るまで、地域リーダーを対象としたワークショップ、参加型調査による地域課題の解決、ユース・サービス、移民・難民教育支援等の様々な活動を通して、地域課題学習やコミュニティ・エンパワメントの場として、地道なポピュラー・エデュケーション実践を続け、今日ではグローバルなポピュラー・エデュケーション・ネットワークを形成するまでになっている[2]。

ハイランダーに関する研究は、特に創設者のひとりであるマイルズ・ホートンの信念や努力と HFS が公民権運動に果たした役割について、そして主に 1961 年に HFS が閉校に至るまでの歴史分析など、その研究の蓄積は大きい[3]。さらに近年では、ハイランダーセンターのワークショップについても研究関心が高まり、2016 年には、***Adult Learning*** が”Special Issue: Embodying Authentic Leadership Through Popular Education at Highlander Research and Education Center（特集：ハイランダー研究教育センターにおける民衆教育による確かなリーダーシップの具体化）“という特集を組んでいる[4]。

本稿では、2019 年開催のワークショップ”Rage, Hope, and Community（怒り、希望とコミュニティ）”の参与観察をもとに、ハイランダーセンターにおける地域リーダー育成のためのワークショ

---

[1] 1961 年、シチズンシップ・スクール・プログラムの運営は SCLC（Southern Christian Leadership Conference、南部キリスト教指導者会議）へと移行する。シチズンシップ・スクール・プログラムについては、藤村好美「Highlander Folk School における成人教育の展開―Citizenship School Program を中心に―」東京大学大学院教育学研究科生涯教育計画講座社会教育学研究室『生涯学習・社会教育学研究』1996 年、藤村好美「ハイランダー市民権学校プログラムの公民権運動との係わり―セプティマ・クラークの実践を中心に―」紀尾井生涯学習研究会『生涯学習フォーラム』2002 年、藤村好美アメリカ公民権運動における黒人女性―セプティマ・クラークの闘いと心の叫び」『群馬県立女子大学紀要』第 31 号、2010 年他を参照。

[2] ポピュラー・エデュケーションとは、ここでは 1970 年代のブラジルの教育者パウロ・フレイレの識字教育実践を示す概念として理解する。”poular”とは、スペイン語やポルトガル語では、”of the people”（民衆の、人民の）を意味する。フレイレは、ブラジルの貧困状況にある抑圧された人々の識字教育に関わり、識字学級の参加者は課題提起型教育を通して文字の読み書きを学ぶだけではなく、彼らを抑圧し貧困状況に追いやっている社会のシステムと闘う術を学んでいった（http://sites.tufts.edu/foodeconomyfinalreport/files/2013/04/Popular-Education.pdf）。なお、バートレットによれば、米国では同様の教育実践を”critical pedagogy”（批判的教育実践）として理解することが多いという（Lesley Bartlett、“Dialogue, Knowledge, and Teacher Student Relations: Freirean Pedagogy in Theory and Practice” in *Comparative Education Review, vol.49, no.3, 2005, 344*）。

[3] Frank Adams, *Unearthing Seeds of Fire: The Idea of Highlander*, Winston-Salem, N.C., John F. Blair, 1975, Myles Horton with Judith Kohl & Herbert Kohl, *The Long Haul: An Autobiography*, New York, Teachers College Press, 1998, John M. Glen, *Highlander: No Ordinary School* (2nd Edition), Knoxville, The University of Tennessee Press, 1996 他を参照。

[4] *Adult Learning,* Volume 27, Number 3, August, 2016.
(https://journals.sagepuv.com/toc.alxa/273, retrieved 06/14 2019)

ップの展開とそこでの地域リーダーたちの学びについて論じるとともに、ハイランダーセンターが90年近くにわたり脈々とコミュニティ教育の火を絶やさずに、力強く活動の輪を広げている理由は何かを探る糸口としたい。

第一節では、ハイランダーセンターの設立の経緯と概要を紹介するとともに、ワークショップ開催が迫る中で突然の放火に見舞われたハイランダーセンターの被る試練の小史を振り返る。第二節では、2019年5月から6月にかけて開催されたワークショップ“Rage, Hope, and Community”の展開について、筆者の参与観察をもとに分析する。続く第三節において、ハイランダーセンターのワークショップの特徴を明らかにし、最後に、幾多の試練にみまわれながらもハイランダーの学びと実践が今日まで連綿と続いてきた秘密は何かを探って、まとめとしたい。

１．ハイランダーセンターの設立と概要

(1) ハイランダーセンター設立までの経緯

HFSにおける民衆教育の歴史について、ここでは詳細は触れることはしないが、HFSが設立以来貫いて来た社会的公正の追求の姿勢が、当時の白人中心のアメリカ社会において、大きな挑戦であり脅威であったことは疑いの余地がない。特に南部連合の要であったテネシー州において、白人中心主義に対して公然と反対の姿勢を貫き、シチズンシップ・スクールやその他のワークショップにおいて、白人と黒人の統合教育を展開し、公民権運動の思想的基盤となっていったHFSについて、州政府当局が快く思っていなかったことは想像に難くない。

グレンは詳細な記録をもとに、1954年から1961年の閉校にいたるまでのHFSに対する南部人種分離主義者たちによる様々な攻撃と法的措置について整理している[5]。テネシー州議会がHFSの学校設立許可書の取り消しに至る決定的な文書として、1959年のテネシー州議会に対する委員会報告書がある[6]。委員会報告書では、「委員会は「(この) 学校 (HFS)」はその言葉が通常意味するような「学校」ではなかったし、今もそうではない。通常の授業は行われなかった。常勤の教員スタッフを擁しているわけでもなく、通常の教育カリキュラムがあるわけでもなく、学校の活動と思われるような日常の活動も行っていない。卒業証書、証明書、学位といった類のものはどれも提供されていない」[7]と述べ、HFSが「学校」の体をなしていないことを強調している。また、設立に関わったJames Dombrowskiらには「非米活動」を行っていた疑いがあるし、Myles Hortonも破壊活動を行う組織に属していたことがあり、このような事実は学校設立許可書の意図とはかなり離れ

[5] John M. Glen, *op. cit.*, 207-250.
[6] Tennessee General Assembly, Joint Committee on Highlander Folk School, *Committee Report: To the Members of the 81st Session of the General Assembly of the State of Tennessee at Nashville, Tennessee*, 1959.
[7] Tennessee General Assembly, Joint Committee on Highlander Folk School, *op.cit.*, 4.

ていると述べている[8]。この委員会報告書を受け取った当局は、HFS に対して強制捜査に乗り出す。1959 年 7 月 31 日、ホートンがドイツで開催の成人教育に関する国際会議に出席のため留守にしていたその日に強制捜査に入った警察は、HFS でワークショップに参加していたスタッフのセプティマ・クラークとガイ・キャラワン、その他ワークショップの参加者数名を逮捕する[9]。その後の裁判を経て、1961 年 8 月、テネシー州は HFS の設立許可を取り消しその土地（テネシー州モンティーグル）を没収する。

HFS はこうして閉校となった。しかしハイランダーはすぐに活動を再開する。ホートンらは、1961 年 8 月 28 日、テネシー州から設立許可を受け、ハイランダーセンターを新たに立ち上げる。グレンは、テネシー州当局はハイランダーセンターが法的に違法でない限り、それを阻止することはできなかったと述べている[10]。ハイランダーセンターはノックスビルのダウンタウンの小さな 2 階建ての建物で、その活動を再開したのである。その後 10 年間、ハイランダーセンターはノックスビルで主にアパラチア地域の問題解決学習やユース・サービス活動を展開するが、その間もハイランダーセンターは数々の試練に見舞われる。例えば、1963 年に開催したノース・サウス・ユース・キャンプでは、開催間もなくブラウント郡のシェリフがキャンプのディレクターと数名の参加者を逮捕し、キャンプは中止となる。その他、1960 年代を通して、ノックスビルでクランがハイランダーセンター反対のデモ行進を繰り広げたり、キャス・ウォーカーがハイランダーについて「ノックスビルを恐怖におとしいれるグループ」という記事を発表したり、ハイランダーセンターのオフィスが壊されたり、オフィス内のデータベースが盗難に合ったり、ハイランダーへの白人社会からの嫌がらせが続いたのである[11]。

(2) 現在のハイランダーセンター

現在、ハイランダーセンターは設立当初の地であるノックスビルから北東に 25 マイルのテネシー州ニューマーケットの小高い丘の上にある 186 エイカー（約 75 万平方メートル）[12]にわたる敷地にワークショップセンターや寮、図書館、ホートン・ハウスなどが点在している。1971 年にノックスビルのダウンタウンの再開発のため、撤退を余儀なくされ、現在の土地を購入したという[13]。1961 年に HFS からハイランダーセンターへと活動が移った後も、白人社会からの嫌がらせは続き、

[8] *Ibid.*, 3.
[9] John M. Glen, *op. cit.*,231-232.
[10] *Ibid.*, 249. またこれについて、30 年にわたりハイランダーセンターのスタッフを勤めているスーザン・ウィリアムズ氏に筆者が尋ねたところ、「テネシー州当局としてはハイランダーの活動の再開を望まなかったかもしれないが、法的に何ら問題がなかったので、設立許可書を得ることが可能であったのだろう」と語っている。（Susan Willias 談、2019 年 5 月 31 日、ハイランダーセンター）
[11] ハイランダーセンター内の掲示（2019 年 5 月 29 日、筆者確認）
[12] 幕張メッセの面積は約 75 万平方メートルである。
[13] Susan Williams 談、2019 年 5 月 31 日、ハイランダーセンター。Candie Carawan 談、2019 年 6 月 1 日、ハイランダーセンター。

例えばテネシー州の環境保護団体がハイランダーセンターを訪問したという理由で共産党員であると中傷されるという事象が報告されている[14]。このようなハイランダーへの嫌がらせの象徴ともいえる出来事が 2019 年 3 月末に勃発する。ハイランダーセンターの入り口付近にある本部建物が何者かによって放火され、全焼してしまったのである[15]。本部建物内には、多くの貴重な歴史的資料が保管されていたが、それらも灰と化してしまった。今回、筆者が参加したワークショップの際も、外部からの来訪者に対する厳しい安全策が講じられ、「これまでの誰でも自由に受け入れるハイランダーからほど遠いものとなってしまった」と参加者の一人が涙ぐんだほどである。図 1 はハイランダーセンターの全景、図 2 は全焼した本部建物（Main Office）である。

図 1　ハイランダーセンター全景

（ワークショップセンターから入口のファームハウスを望む、筆者撮影）

[14] ハイランダーセンター内の掲示（2019 年 5 月 29 日、筆者確認）
[15] これについて原因はまだ解明されていないが、火事の後の駐車場に白人至上主義者を意味する落書きがされていたという報告もある。（https://www.nytimes.com/2019/04/03/us/civil-rights-center-fire.html, retrieved 06/15/2019, *Highlander Center's View from the Hill - June 2019 #89* 他）

図 2 全焼した本部建物（筆者撮影）

(3) ハイランダーセンターの活動目的、組織とスタッフ

ハイランダーセンターはアメリカ合衆国の内国歳入法 501(c)(3)団体に区分される非営利組織（教育）であり、その活動目的（Mission Statement）を次のように述べている。

> ハイランダーはアパラチア地域と米国南部における草の根の組織化と運動の触媒としての働きをします。我々は、公正や平等、社会の持続可能性を求めて活動する人々と共に活動し、自らの運命を形作るために集団的行動を起こす人々を支援します。民衆教育、言語の公正、参加型調査、文化活動、異世代交流の組織化を通して、我々はハイランダーにおいてまた地域のコミュニティにおいて、人々が空間を創造する助けとなります。その空間では、人々は知識、希望、勇気を獲得し、何が可能であるかという考えを拡張していきます。我々はリーダーシップを育成し、それぞれのコミュニティで、公正、平等、持続可能性を求めて活動する力強く民主的な組織、そして他者と協力して、社会的、経済的、修復的な環境変化のために広範な運動を展開する組織を作る助けとなります[16]。

[16] https://www.highlandercenter.org/our-story/mission/, retrieved 06/15/2019.

ハイランダーセンターの組織は、理事 20 名と 20 数名の常勤スタッフ及び複数の非常勤スタッフにより運営されており、スタッフは以下のようなチームに分かれて活動している。

・事務局長（二人体制）	2 名
・運営チーム（事務局長補佐及び会計を含む）	3 名
・教育チーム	6 名
・開発＆コミュニケーションチーム（募金を含む）	2 名
・ワークショップセンターチーム（非常勤を含む）	9 名
・土地建物チーム	2 名
・アーキヴィスト（公文書保管人）	1 名

そして事務局長 2 名と各チームから 1 名ずつ選出されるコーディネーターによって、毎週ミーティングが持たれ、横の連絡・連携がはかられている。また、各チームのスタッフ採用にあたっては、資格ではなく個人の能力を重視した採用体制をとっており、教育チームのファシリテーターにしても学歴や資格などではなく、あくまでも「何をしてきたか」「何ができるか」を基準に採用している[17]。

今回の調査で、教育チームのスタッフに面接し、ハイランダーセンターのスタッフになった経緯を尋ねたところ、4 名から次のような回答が得られた[18]。

＜A さん（she, her）教育チームコーディネーター＞2019 年 6 月 2 日面接

テネシー州で生まれ、育った。白人労働者階級の出身。

2005 年、大学院修士課程 2 年生（テネシー大学ノックスビル校）の時に、ハイランダーセンターのインターンシップに参加し、週に 3 回、1 年間、フルタイムで地域教育実践に携わる。2006 年、インターンシップ終了後も、引き続き 4 か月ハイランダーにインターンとして残って活動する。ちょうどその頃、2005 年 8 月にニューオーリンズを襲ったハリケーンカトリーナの被災者が次々とハイランダーを来訪していた。大災害を目の当たりにしたことは衝撃的であった。インターン終了後、テネシー大学大学院でソーシャルワークの修士号を取得。その後 10 年間、テネシー州やテキサス州で様々な仕事に従事する（テネシー州のコミュニティ新聞『ノックスビル・ボイス』のエディターやテキサス州で食物の福祉と公平に関する仕事など）。現在、教育チームのコーディネーターとして、Appalachian Transition Fellowship （アパラチアン・トランジッション・フェローシッ

[17] Susan Williams 談（2019 年 5 月 31 日、ハイランダーセンター）
[18] ハイランダーセンターでは男女の明確な区別を行っていない。各人が自らの代名詞をどのように使用するかを自己申告しており、she, her（いわゆる女性）、he, him（いわゆる男性）、they, them（男女の区別を行わない）の三者に分かれる。なおここで they, them とは複数形ではなく単数形である。

プ）[19]を担当。

＜B さん（they, them）教育チームスタッフ＞2019 年 6 月 1 日面接

ジョージア州出身。大学で、経済学を専攻。コミュニティの組織化や教育に関心がある（大学で経済学を専攻したのも、コミュニティの組織化や教育に役立つと思ったから）。

大学卒業後、2010 年、ハリケーンカトリーナ（2005 年 8 月）被災後のニューオーリンズの組織化に携わり、高校生のスクール・フード・システム活動（食べ残しをコンポストして堆肥として土に返し、その土で野菜を作り、レストランに売り、その利益を組織に還元するという循環型活動）を支援した。その年（2010 年）、ハイランダーセンターのリーダー養成ワークショップ “Threads 2010”に参加する。このワークショップは、1 年間のサイクルで、3 か月ごとに週末（木曜日から日曜日）の 4 日間開催される宿泊型ワークショップで、ハイランダーの手法や民衆教育について学ぶものである。ワークショップ終了後は、2011 年から、フィラデルフィアで、ハイランダーの手法を用いてコミュニティ開発の活動や青少年教育に従事する。その後、故郷のジョージア州に移ってコミュニティ開発の活動に携わるが、2018 年からハイランダーに移って活動を始めたところである。

（「なぜハイランダーセンターのスタッフとして活動したいと思ったのか」という問いに答えて）、ハイランダーの活動はより政治的な意味があり、社会運動に関わる仕事であり、（自分は）常々、地域の変革（community transformation）に関わりたいと思っていたので。（「現在の仕事について」の感想は、）常に、仕事量に対してスタッフの数が足りない状況である。

＜C さん（she, her）教育チームスタッフ＞2019 年 6 月 2 日面接。

チリ出身。10 歳の時アメリカに来る。2011 年から、移民の権利や人種の公正を求める運動に参画していた。ハイランダーセンターに来る前は、ニューヨークの複数の全国組織で働いていた。ひとつめは、Responsible Endowment Coalition（リスポンシブル・エンダウメント連合）で、化石燃料の会社を担当し、大学基金の出資の仕事をしていた。ふたつめは、Action Center on Race and the Economy(人種と経済のアクション・センター)で、資金調達の組織的活動に従事していた。2018 年秋、ウェブサイトでハイランダーセンターの求人情報を見て、「これだ」と思って、応募。面接のプロセスを通して、ハイランダーの活動を良く理解し、ここで働きたい、と思う。特に共感した点は、ハイランダーの手法と”language justice（言語の公正さ）”の考え方である。ハイランダーの理論は生きた理論であると思った。

選考にあたり、ハイランダーセンターの面接では、23 人のスタッフ全員（つまり、掃除担当のス

[19] Appalachian Transition Fellowship とは、中央アパラチア（West Virginia, Southwest Virginia, Eastern Kentucky, Eastern Tennessee, Appalachian Ohio and Western North Carolina.）の課題解決と変革のための地域リーダー育成プログラムで、10 人のフェローは、1 年間フルタイムで有給で地域リーダーとして活動する (http://www.appfellows.org/, retrieved 06/15/2019)。

タッフも料理担当のスタッフも）が面接官になったことで、各人からたくさんのことを聞かれた。選考プロセスは大変なものである。現在、ユース・プログラムである Seeds of Fire の単独コーディネーターを務めている。

＜D さん（they, them）教育チーム運営管理＞

テネシー州の大学を卒業後、10 年くらい不動産会社や医療保険会社（Blue Cross Blue Shield）で会社運営管理の仕事をしていた。現在、ハイランダーセンターの事務局長（二人体制）のひとりと同じ地域に住んでいて、その人からハイランダーセンターで運営管理の仕事の求人があることを知らされて、応募した。教育チームに所属しているが、ファシリテーターではなく、仕事の内容は運営管理や事業の計画実行である。7 人の子供を育てながら、ノックスビルのダウンタウンから約 40 分かけてハイランダーセンターに通勤している。

２．ワークショップ ”Rage, Hope, and Community ”

(1) ワークショップの趣旨と対象

ワークショップ“Rage, Hope, and Community”（怒り、希望とコミュニティ）は、今年で 3 回目を数えるコミュニティの組織化のためのワークショップである。ハイランダーセンターはワークショップの希望者を募集するにあたって、「このワークショップは、人々や家族、コミュニティに対するひどい攻撃に対抗して行動する団体のための訓練の場を提供することを目的とし、ハイランダーに集い、アイディアや戦略、希望を分かち合い、コミュニティに戻った時どのような組織化が可能かを確認し、コミュニティをつなぐ関係を構築し、団結力を増し、公正、公平、民主的な社会の構築を目指すものである」との趣旨をウェブサイト上で公開し、その内容を応募者にメールで送信し確認している[20]。「ひどい攻撃（terrible attacks）」とは、そこでは具体的には示されていないが、社会的弱者への偏見や差別、移民や難民に対する非人道的対応などを指しているのであろう。そしてこのワークショップは、コミュニティの組織化のために地域の団体のリーダーの参加を集い、コミュニティに戻った時に確実に次なる行動をとれるように、可能であればそれぞれの団体から二人組で参加することを推奨している。筆者は応募にあたって、コミュニティのリーダーでもなければ、社会の中でひどい攻撃を受けているわけでもないので、ワークショップの対象とはかけ離れた部分があったため、事前にハイランダー側に筆者のワークショップ参加の目的は「ハイランダー研究のため、参与観察を目的としている」ことを伝えて理解を求めた。寛大にも筆者の目的を理解して、ワークショップ参加を許可してくださったハイランダーセンターの教育チームの方々には感謝してやまない。

[20] http://mail.google.com/mail/u/0#search/Kayla/FMfcgxwBVWGTGFCZFrDsHDzhzbRSmJL, retrieved 06/17/2019.

(2) ワークショップの参加費

参加費については、志を持ちながら金銭的な理由で参加を断念することがないように、次のような工夫がされていた。以下、ハイランダーセンターの説明文を引用する。

> 私たちは、参加費が誰の障害にもならないことを願っています。一部奨学金の利用も可能ですし、現在団体の参加を後押しするために、募金活動も行っています。出費について心配があり、相談されたい場合は喜んでお手伝いします。参加にあたって、旅費も含め、奨学金や支援が必要な場合、あるいは逆に奨学金を提供してくださる場合は、ハイランダーのスタッフに連絡してください。
>
> 参加費は 300 ドルから 1,100 ドルのスライド制になっています。参加者の個人、団体の支払い能力に応じて支払ってください。可能であれば、500 ドル以上の貢献をお願いします。4 日間のワークショップ（宿泊費と食費を含む）の実費はおよそ 730 ドルですが、差額はハイランダーセンターが負担します。多くを負担してくださる人がいれば、それは他の人の奨学金に充てることができます[21]。

(3) 参加者

ワークショップの参加者は 31 名、ハイランダーのファシリテーターは 5 名であった[22]。スタッフと参加者の属性は、表 1 のとおりである。

ここから今回のワークショップの参加者の多くが、チカーノ（メキシコ系の移民またはその子孫）であり、その活動の中心が、中南米からアメリカへの移民や難民の支援にあるという実態が見える。特にトランプ政権になってから、チカーノ移民・難民の支援は喫緊の課題となっている。さらに、HFS が公民権運動と大きくかかわっていたという歴史を継承し、黒人の人々の生活支援や人権擁護に関わる団体からの参加も多い。黒人の文化や生活様式を取り戻そうという動きも、そこにはある。特徴的であったのは、プエルトリコ（アメリカ市民権を有する）からの参加者の活動である。彼らは、ハリケーン被災害後のプエルトリコ再建を支援しながら、プエルトリコ人としてのアイデンティティを模索している。

また参加者の性的属性では、they/them と表明した人が 36 名中 4 名であった。さらに言語に関して、英語とスペイン語の両方を理解する人も英語として分類したが、スペイン語のみを理解する人が 22%いて、彼らの言語的権利が保障されている点は注目に値する。

---

[21] http://mail.google.com/mail/u/0#search/Kayla/FMfcgxwBVWGTGFCZFrDsHDzhzbRSmJL, retrieved 06/17/ 2019.

[22] 5 名の内訳は、前述の Susan William 氏に加え、今回インタビューに答えてくれた 4 名（A さん、B さん、C さん、D さん）である。

表 1 ワークショップの参加者とスタッフの属性

所属組織		性的属性		言　語		国　籍	
ハイランダー	5	she/her	24	英語	28	アメリカ	35
移民・難民の支援に関わる団体	11	he/him	8	スペイン語のみ	8	(プエルトリコ2を含む)	
黒人の支援に関わる団体	5	they/them	4			日本	1
コミュニティ団体	3						
人種問題に関わる団体	2						
人権擁護に関わる団体	2						
社会的公正のための基金	2						
治癒の公正に関わる団体	2						
プエルトリコの支援に関わる団体	2						
社会活動家（社会的公正）の団体	1						
その他	1						
総　数	36		36		36		36

（ハイランダーセンターの資料をもとに、筆者作成）

(4) 一連のプログラムの流れ

4 日間のプログラムを表 2 に示した。これは、アジェンダとして事前に提示されたものをもとに実際に行った活動に合わせて修正を加えたものである。参加者の関心やグループワーク、ディスカッションの進行によって、アジェンダは常に更新されていった。主なファシリテーターはハイランダーセンターの教育チームのスタッフである。

表 2　Program – Rage, Hope, and Community 2019

場所:特に示されていない限り、すべてのワークショップはワークショップ・ルームで行う。食事はすべて、カフェテリアで提供される。

Start / End Time	5 月 29 日（水）
6:00 pm	夕食
Start / End Time	5 月 30 日（木）
8 - 9:00 am	朝食
9 - 11:30 am	Optional: 参加者主体の活動（Icarus Project による） **Joyful Raging Olympics –** Rage（怒り）とは何かをゲームを通じて確かめ合おう
9 am - 1:00 pm	参加登録
12:00 - 1:00 pm	昼食
1:00 - 1:55 pm	開会, 歌, **Language Justice**（公正な言語） プログラムの確認とオリエンテーション
1:55 - 2:55 pm	**Introductions:**参加者とファシリテーターの自己紹介
2:55-3:15 pm	**Workshop Agreements:** 参加者の話し合いでワークショップの約束事を決定（たとえば、写真は許可を得てから）
3:15-3:35pm	休憩
3:15-4:05 pm	**Highlander grounding:** ハイランダーについての基礎知識（歴史と現在）

4:05-5:30 pm	**Popular Education:**民衆教育について
5:30 – 6:00 pm	内外の安全について（地域ボランティアによる説明）
6:00-7:30	夕食
7:30-10:00	**Deeper introductions of our communities and organizations** コミュニティと所属団体についての紹介
Start / End Time	5 月 31 日（金）
8 - 9 am	朝食
9:00-12:00 pm	**Healing Justice and Cultural Organizing:** 公正な治癒、文化の組織化
12-1:30pm	昼食
1:30-3:15	**Examining issues and root causes in our communities:** コミュニティの課題とその原因についての分析
3:15-3:30	休憩
3:30-5:05	**Outreach and Basebuilding:** アウトリーチと基盤構築
5:05-5:15	振り返り
6-7:00	夕食
7-10	**Cultural Sharing:　文化交流** 参加者のコミュニティやルーツの紹介（ダンス、歌、演技など）
Start / End Time	6 月 1 日（土）
8-9am	朝食
9:00-11:00am	**Healing Justice 2** (公正な治癒について 2)
11-11:15	休憩
11:15-12:30pm	**Decolonizing**（脱植民地化とは）
12:30-1:30	昼食
2:00-5:00	**Leadership Building**（リーダーシップの構築）
5:00-6:00	振り返り、休憩
6-7:30	夕食
8 until wee hours	Party!　パーティ、キャンプファイア
Start / End Time	6 月 2 日（日）
9 - 10:45 am	**Group Discussion** (これまでを振り返って)
10:45-11:00 am	休憩
11-11:45 am	**Synthesis & Evaluation:** まとめと評価
11:45-12:30 pm	閉会
12:30-1:30 pm	昼食、解散

（ハイランダーセンターの資料をもとに、筆者作成）

個別のプログラムの中身に言及する前に、まずワークショップ全体の流れと方法、そしてそれを取りまくハイランダーの空気について、筆者の体験をもとに紹介する。まず、参加者を包み込むワークショップ・ルームである。円形の部屋を取り囲むように、３０余りのロッキング・チェアが並んでいる（図 3)。参加者は、この椅子に揺られながら、人々の話をして聞き、考え、うなずいたり、笑ったり、時には涙ぐむ。そして今回、予想しなかったことであったが、部屋の中央の床に座ったり歩いたりしながら、同時通訳者がつぶやくようにスペイン語から英語へ、英語からスペイン語へと常に通訳している。参加者は通訳用のレシーバーを事前に受け取っている。Language Justice(言語の公正)である。スペイン語しか話さない参加者とスペイン語を理解しない参加者が、ここには、（というよりも現在のアメリカには）同居しているという事実を目の前にする。そしてここでの公用語は英語とスペイン語なのだ。ハイランダーセンターにおける学習者にチカーノの人々が加わってから久しい。アメリカの人種構成や社会状況の変化が鮮明に表れている。

図 3　ハイランダーセンターのワークショップ・ルーム内部（筆者撮影）

ワークショップでの時間はゆったりと流れる。グループに分かれて討論したり作業したりすることが多いので、あらかじめプログラムで割り振った時間を超過したりするが、１日のうちにどうにか帳尻がつく。グループワークは、ワークショップ・ルーム内で移動したり、ワークショップ・ルームを出て、ベランダのベンチやカフェテリア横のテーブルを使ったり、時には屋外の芝生の上で行ったりする。鳥のさえずりが心地良い。グループワークの討論の続きが、カフェテリアでの食事

の場に持ち込まれることもある。寮がワークショップ・ルームに隣接しているので、忘れ物があれば、量の部屋に戻って取ってくる。でも、だらだらと遊んでいる訳ではない。心が解放されるとはこういうことか、と思う。

最初は緊張していた人々の顔つきがどんどん変わってくる。１日目に小さな声でスペイン語でしか話さなかった人が、最終日の頃になったら流暢な英語で話している。筆者も緊張から解き放たれて、思わず笑顔になっている。ここでは全ての人が歓迎されている。全体討論でも、ともかく人の話を辛抱強く聞く。皆が真剣で、他の人の話から学びたいという気持ちがひしひしと伝わってくる、時には感動して涙ぐんだり、言葉が詰まったりする人もいる。それでも周囲は通常のようで驚いた素振りも見えない。そしてワークショプが済むと何もなかったかのようだ。（ワークショップの前に、皆で取り決めを話し合い、ここでは自分をさらけ出すのだから、会議の内容を外部にさらけ出すことはしない、という約束をしたので、個別の事例について述べることは差し控える。）

これは学術会議でもなければ通常の授業でもないのだ。学術会議の時の質問のように肩肘張らなくて良いし、国際会議のように最後にアジェンダを文章化しようということもない。ワークショップの成果はそれぞれの人の中にある。それを持ち帰って、「行動に移す」ことが求められる。ホートンが常々言っていた「この会議が終わって、地元に帰ったら、次に何をするのか」という問いが改めて問われる。皆、考え込む。大きな宿題を持ってワークショップを終えることになるからだ。

(5) グループ・ワークの例―プロブレム・ツリーを描いて地域課題について話し合う

ワークショップではグループ・ワークをもとに討論し、それを全体討論につなげていく方法がとられた。特色あるものとして、「プロブレム・ツリーを用いた、コミュニティの課題とその原因についての分析」と「公正な治癒」のグループ・ワークがあるが、紙幅の都合上ここでは前者についてのみ取り上げたい[23]。

プロブレム・ツリーとは、目に見える問題状況の根本原因とその問題状況がもたらす結果を、木の幹（目に見える問題状況）、根（その根本原因）、葉や果実（それがもたらす結果、明らかな問題）に分けて分析する手法であり、民衆教育や開発教育で活用されている[24]。ワークショップでは、まずファシリテーターがプロブレム・ツリーについて簡単な説明を行い、グループにつぎのような問いかけをした。

プロブレム・ツリーを描いてみよう。

1. 果実と葉：問題に関連して生じる症状や目に見える結果は何か？（最も顕著なもの）

[23] 「公正な治癒」については、稿を改めて考察する予定である。

[24] The Change Agency. Org によれば、プロブレム・ツリーの考案者は Lisa VeneKlasen と Varie Miller である（https://commonslibrary.org/wp-content/uploads/Process-Guide-Problem-Tree-Analysis.pdf, retrieved 06/22/2019）。日本では、問題分析系図のひとつとして説明されている（http://gc.sfc.keio.ac.jp/class/2006_14635/slides/06/index_16.html, retrieved 06/22/2019）。

2. 木の幹と枝：問題の直接の原因やそれを引き起こす要因は何か？（少し目にみえる）
3. 根：問題の原因の下に潜んでいる根は何か？（最も目に見えないもので、構造的なものであり、直接の原因を引き起こすもの）

参加者のうち英語話者の多くはプロブレム・ツリーについてすでに基礎知識を持っている者が多く、この問いかけを受けてすぐにグループ・ワークへと移行した。31 名の参加者はおよそ 5〜6 名のグループに分かれ、大きな模造紙を前に、協同でひとつのプロブレム・ツリーを描いて行った。筆者も、グループに参加し、身の回りのコミュニティや組織で何が問題となっているかを話し合いながら、木の幹と根、そして葉と果物の部分を描いて行った。図 4 はファシリテーターから提示されたプロブレム・ツリー、図 5 はワークショップで藤村のグループが実際に作成したプロプレム・ツリーである。筆者の参加したグループでは、グループ・メンバーの各自が問題の幹と根、葉と果実について思いつくままに列挙していき、出来上がったプロブレム・ツリー（図 5）を見ると、コミュニティ全体の問題のみならず活動を担う個人の問題を挙げた例が多く、開発教育で一般に提示されている例とは異なる様相を示した。プロブレム・ツリー分析は社会の問題状況だけではなく、それを背景とする個々人の心の状況まで映し出していると言うことができるのかもしれない。

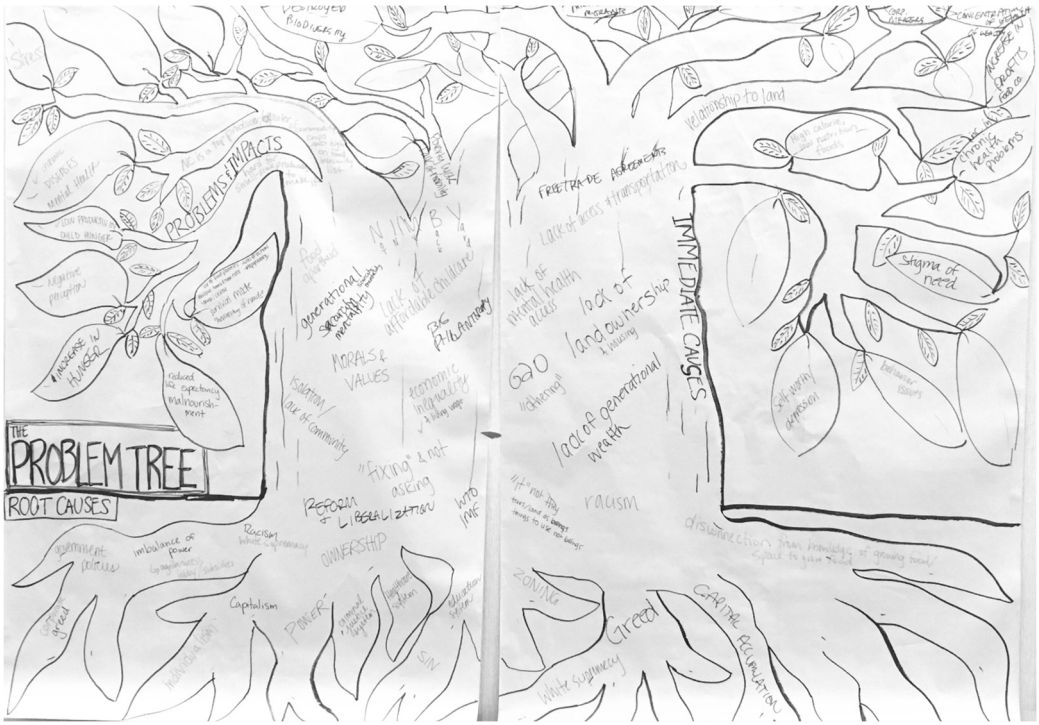

図 4　プロブレム・ツリー

（出所：ハイランダーセンターのワークショップ資料より）

プロブレム・ツリーに限らず、今回参加した様々なグループ・ワークで筆者が驚きを覚えたのは、参加者たちの表現力の豊かさと協同の姿勢である。言葉だけではなくそれをイラストで豊かに表現する感性と、他者の意見に耳を傾けて協同で何かを作り上げていこうとする姿勢にポピュラー・エデュケーションの何たるかを見たような気がした。

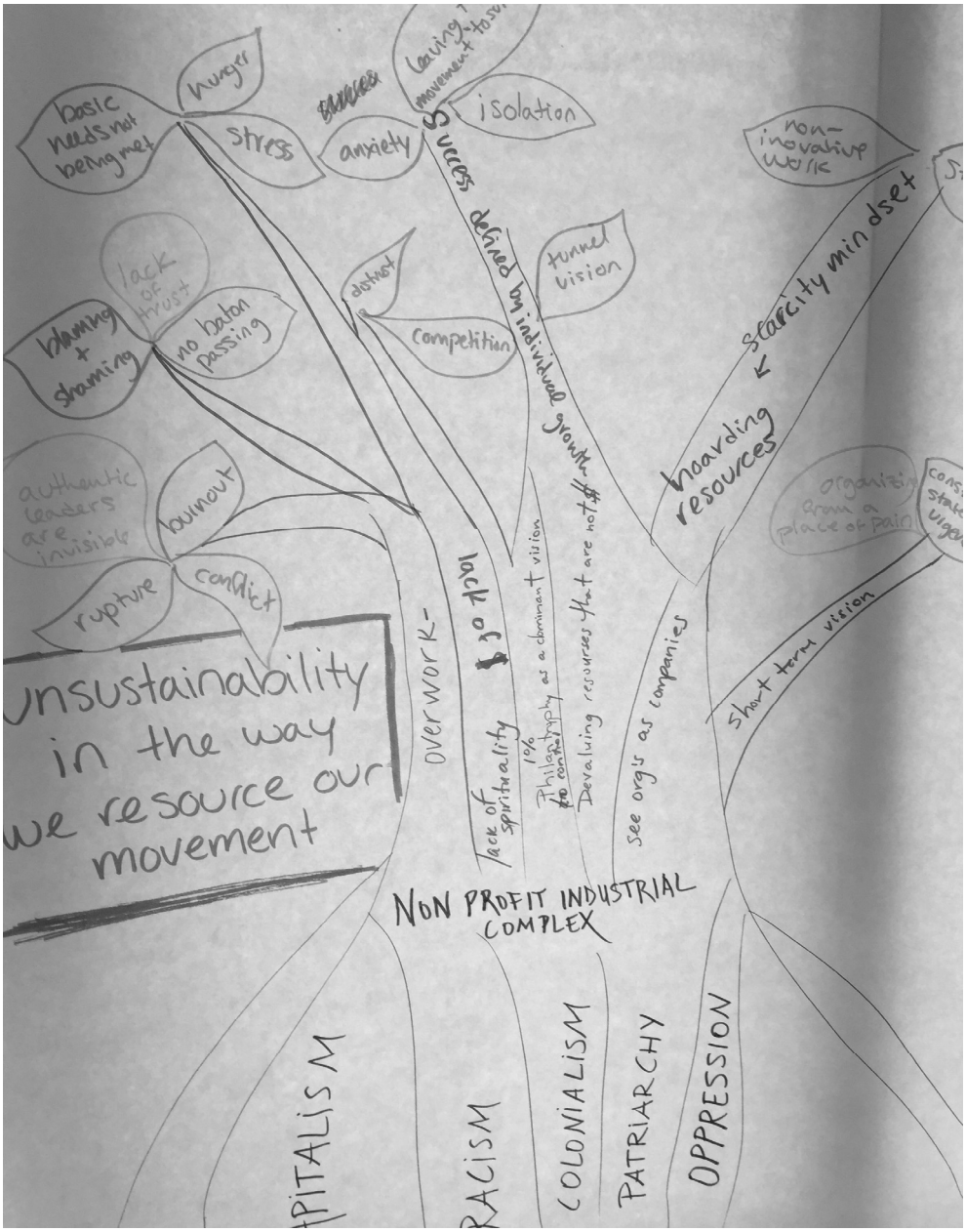

図５　ワークショップで作成したプロブレム・ツリー

３．ハイランダーセンターのワークショップの特徴―まとめに代えて

ここまで、ハイランダーセンターのワークショップの参与観察をもとに、ハイランダーにおけるコミュニティ・リーダーの学びの様子を追ってきた。それは次のような点で、いわゆる通常のリーダー養成（育成）プログラムとは異なるものであった。

1. カリキュラムが固定化していない（参加者の意見に基づき、変更することがある）。
2. 単位や学習成果を測るものはない。
3. そのため学習時間にも柔軟性がある。
4. ファシリテーターと参加者の関係が双方向的である（両者が共に学び、教える関係）。
5. 学習者間にコミュニティ意識が芽生える。
6. 文化的活動を取り入れた学習環境が提供される。
7. 文化的・民族的ルーツを互いに尊重し合う。
8. 学習者の意識変容を伴う。
9. しばしば grief の体験を伴う。

このような特徴（1～8）は、critical pedagogy（批判的教育実践）の特徴に合致する[25]。それに加え、ハイランダーのワークショップでは、参加者が自らの体験をさらけ出し、心を吐露することで、しばしば grief（苦悩）の体験が表出される（9）。この点はハイランダーのハイランダーたる特徴であろう。

あらためて、ワークショップ・ルームの周囲のロッキング・チェアに腰かけた参加者の様子と表情を反芻してみよう。ファシリテーターや通訳者の低めの声。プログラムの始まりと終わりに共に歌うことによる一体感。それまで参加者の抱いていた不安な気持ちが徐々に溶けていき、ゆったりとした学びの環境が生まれる。スーザン・ウィリアムズは自らの経験を踏まえ、ワークショップの参加者について次のように述べ、ハイランダーセンターについて、「参加者を歓迎するような温かい空間と細部にわたる配慮によって、参加者は自らの安全圏から出て、成長し、変化するのです」[26]と分析している。

---

[25] Sophie Degener は、教育実践を、highly critical（非常に批判的）、somewhat critical（少し批判的）、somewhat noncritical（あまり批判的でない）、highly noncritical（全く批判的でない）の 4 類型に分類し、その特徴を論じている（Sophie Degener, “Making Sense of Critical Pedagogy in Adult Literacy Education,” J. Comings et al eds., in *The Annual Review of Adult Learning and Literacy*, 2000 (http://citeseerx.ist.psu.edu/viewdoc/download?doi=10.1.1.839.8455&rep=rep1&type=pdf, retrieved 06/29/2019).

[26] Susan Williams, MS and Cathy Mullett, MA, “Creating Highlander Wherever You Are” in *Adult Learning*, Volume 27, Number 3,August 2016,100. (https://www.researchgate.net/publication/305735342_Creating_Highlander_Wherever_You_Are, retrieved 06//14/2019).

参加者は、自分がワークショップの進行にとって重要な存在ではないのではないかと恐れているかもしれません。自分は年を取りすぎているのではないか、若すぎるのではないか、また、黒人すぎるのではないか、白人すぎるのではないか、と心配するのです。この場の環境にそぐわないのではないかとか、ここ（ワークショップ）には誰も知っている人がいない、と恐れるのです。ある人は、人前で話をすることに恐怖感を覚えます。こういったことは、無理もない恐れと心配事であって、支援者はそれを尊重しなければなりません[27]。

このように、ワークショップの参加者が、時には自分はその場面にそぐわないのではないかという恐れの気持ち（fear）を持ったり、自分だけが周囲とは異なり浮いているのではないかと不安に思ったりすることは、ハイランダーでなくとも良く見られる現象かもしれない。そのような学習者に支援者はどのように対峙すれば良いのか。時には涙ぐみ感情がほとばしるような学習者の反応を包み込むようなハイランダーの支援者と参加者たち。ここは教会の中なのかと勘違いするくらいである。例えて言えば、ピアグループ・ディスカッションであろうか。HFS の時代から連綿と引き継がれてきた学びの空間、これこそがハイランダーが幾多の困難を経ながら、場所を変え、スタッフが入れ替わっても、今日まで popular education の火を絶やさずに続いて来たひとつの要因なのではないか。今後、さらなる検証を続けていきたい。

＜謝辞＞

ハイランダーセンターの参与観察と情報収集にあたり、同センターのエデュケーションチームの Susan William 氏、David Ferris 氏、その他同センターのスタッフの方々のあたたかい協力を得た。ここに記して感謝申し上げたい。

[27] *Ibid.*,100.